慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近世資本主義起源考続論（三）
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.10 (1922. 10) ,p.1432(58)- 1440(66)
JaLC DOI	10.14991/001.19221001-0058
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19221001-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近世資本主義起源考續論（三）

阿部秀助

三

以上、列擧せし商業及金融業と共にブレンタノ教授が資本主義の最も有力なる構成要素と見做したものは戰爭である、即ち同教授の見る處によれば戰爭は商業よりも遙かに古き歷史を有する營利行爲たりしに不拘後者は漸次前者を自己の目的に供するに至つたのである、而して之れが顯著な例證はカルタゴ東部地中海畔の商業國殊に羅馬である、試みに第二ピュニック戰爭前後に於ける同市の狀態を見るに巨大なる軍需品の供給の如き軍道の建設の如き或は凱旋の將軍に對する勳功の大小の如き何れも資本主義的組織や資本主義的精神の存せしことを肯定せしむる證左である、蓋、初期の羅馬は Domus (Domus は拉丁語又たは古代以太利語にて氏神、家族、仕事場、所有地等を包有せるもので、之れが理想とする處は出來丈け自給自足の經濟生活を繰り返すにあつたのである、即ち之れが家族に屬する婦女子は奴隸を使役して糸を紡ぎ或は衣類を織り、又た料理或は穀物を碎く仕事をなし、之れに對して男子は奴隸又たは農奴と共に野外の業務に從事したのである、當時の奴隸に對する一般の待遇は決して後世の如く殘酷なりしものにあらずして多くは家族の一員として其間殆んど何等の差別的待遇を見なかつたのである）を中心とし理想とせしに不拘、既に當時の社會に於て職業上に分化作用の存せしことは仕立職、染物業金屬工業等が一個の獨立的營業として存せしによつて知るを得るのである、斯くの如く工業の發達と共に商業に就きても多少の發達を見るに至つたことは自から羅馬をして之れが附近の地方に對して一種の中央市場と化せしむるに至つたのである、勿論此中央市場はコリント、カルタゴ、アレキサンドリアに比較すれば其初期に於ては單に貧弱なる購買力を有せし農民を顧客とせしに過ぎなかつたのであるが、其後、羅馬の手が亞細亞、亞弗利加の兩方面に及ぶと共に彼れの富は四隣の最も羨む處と化するに至つたのである、殊に亞細亞方面から流入せし金銀は非常の巨額に上り是等は償金にあらざれば直接掠奪の結果として

齎らされしものである、げに「侵略的戰爭は富を生む父なり」との言を古代に於て最も適切に證明したものは羅馬である、此點に於てブレンタノ教授が羅馬の大なる富は資本主義的に組織せられた戰爭の結果であると云つたのは確かに明言である。斯くの如く掠奪的戰爭の結果として貴金屬其他の財寶が著しく流入するに至つたことは純朴なる農民生活を送りし羅馬人をして一面、奢侈淫佚に耽らしむると共に他の一面に於ては著しく拜金の宗徒と化せしむるに至つたのである、例者、カトーの如きは人間の最も神聖なる義務は金儲なりと叫ばしむに至つたのである、斯くて此慾望を滿足せしめんが爲めに幾多の企業は羅馬の內外に於て發生することゝなり、就中、當時最も利益多かりしものとして市民に歡迎せられたのは地所の賣買取引と奴隷商賣とであつたのである、而して東洋方面より輸入せられし奢侈品に對して以太利が何等生產物を以て代ゆること能はざりしことは自から正貨を以て支拂ふことゝなり、然かも掠奪せらる可き資源が枯渴せし場合に於て自から羅馬の貨幣經濟は變じて自然經濟となり、玆に中世的なる經濟組織を出現せしむるに至つたのである。

四

吾人は次ぎに近世に於ける資本主義の起源は果して何れの處に求む可きか、如何にして封建的經濟組織は打破せらるゝに至りしやに就きて考察するに西羅馬帝國に於ける自然經濟の復活は必ずしも資本主義的營利行爲の根本的打破を意味するものでなかつたことは五世紀の初期に於ける以太利の諸都市に於て之れを見るを得るのである、即ち彼等の或者は既に十字軍以前に於て商業上、新たなる富の集積者となり封建的農業的勢力に對立して都市經濟を構成する主要なる要素となつたのである。又た民族移轉の運動以後に於て印度其他東洋方面との商業を繼續せしめた初期の商人はシリア人である、然かも彼等の都市が波斯人及び亞剌比亞人の爲めに侵略せらるゝに至つたことは玆に猶太人をして彼等に代らしむるに至つたのである、而して猶太人が羅馬帝國滅亡前に於て既に世界的商業に從事せしことはアレキサンドリア在住の猶太人に徵して明かである、即ち彼等は早くから商業及金貸業に從事し、又、彼等の或者は政府の許可を得て輸出向穀物の監督の任に當り更に或者は海川交通の事業を經營し、殊に彼等をして其富の大

部分を集積せしめしものは金貸業で彼等の中にはアグリッパ王に二十萬ドラヒメ（古代希臘の銀貨で之れが相場は各地方に於て同じからざるも約五瓦内外の重量を有せしものである）を貸與せしものあり、又、皇帝クラウヂュスの母の御側用人たりしものあり、更にエシオピアの女王カンダケの藏相たりしものがあつたのである、但百十六年及其翌年の慘殺と四百十五年に於ける迫害とは此方面に於ける彼等の經濟的源泉を悉く乾涸せしむるに至つたのである、只だ共通の信仰と傳統とは西班牙、以太利、亞弗利加及東洋方面に於ける彼等を結合せしめ所謂彼等の國際的取引にとりて非常な便益を與えたのである、常時西部歐羅巴の猶太人が、商人として東洋方面に赴いたことは紀元九世紀に於ける亞剌比亞の驛遞監イブコルダドベーの記述せる處によつて明白である、即ち此記述に從へば當時猶太の商人が東洋方面に赴いた通路は大略四つ存したのである、即ち第一の通路は主として海路によつたもので先づ佛國から海路埃及に出で更に紅海を經て印度洋に達せしもの第二は海陸相半ばせしもので地中海から北部シリアの河流オロンテス（現時のナル・エル・アシ）河口に上陸し更にユーフラチス、バグラット、チグリス、波斯灣を經て印度洋に達せしもの第三は陸路で先づ西部歐羅巴から獨逸及スラブ民族の地方を經てカサレン王國の首都イチル（カサレンはウォルガ河畔の王國で其首都イチルは約百年を通じてブルガリア、露國希臘等の諸國の商人が集合した最も重要な市場で殊に七百二十三年ビザンチン帝國に於ける猶太人追逐せらるゝや、彼等の多數は此王國内に移住し專ら亞細亞及希臘方面に於て商業に從事したのである）に達し更にカスピ海を渡つて中央亞細亞方面に至るもの、第四は同じく陸路によるもので先づ佛蘭西及西班牙方面から亞弗利加に渡り之れが北岸地方をたどつて西に出で、更にシリア、バビロニア等を經て印度及支那方面に達したのである、而して彼等は何れも其途次の海港に於て到る處に同族の在住せしものありしを以て之れが爲めに取引上非常なる便利を有したのである、又、復航の際には彼等の一部はコンスタンチノプルに赴き此地にて彼等が東洋方面から齎らした貨物の一部を賣却したのである、而して當時取引に上りし主なる貨物は奴隷、小兒、絹、毛皮、刀劍（以上歐洲より東洋方面へ齎らせし商品）麝香、樟腦、肉類（以上東洋より歐洲に齎らせし商品）等である、而して當時の猶太人が是等の東洋的産物によつて大なる利益を獲得するに極めて好都合の地位にあつたことは彼等の顧客が購買力の貧弱な農

民の徒でなくて當時にありては經濟上强者の地位にあつた王侯或は高貴の僧侶であつたことである、彼のマイシッの大僧正リシュルフが猶太人の齎らした珍獸を購求せしが如き、其他各寺院の内殿を飾つた絨氈の如き多く彼等によつて東洋方面殊に波斯方面から齎らされたのである、殊に斯くの如き場合に彼等の利得を大ならしめたものは單に是等の貨物が珍奇高價のものたるのみでなくて彼等が是等の貨物を獲得せし際之れが代償として使用した奴隷が比較的低廉であつたことである、之れを要するに猶太人は東洋方面の諸產物に對して專ら歐羅巴の諸鑛山から產出した金銀を主として日耳曼民族が戰爭の際に捕虜としたものを交付したのである、加ふるに當時の猶太人の商取引にとりて更に大なる便益を與られたものは中世の寺院法である、即ち同法は當時の人々の營利行爲を否定し貨幣を以つて何等利益を生せざるものと見做せしものにして、又、僧侶にして金貸業を營みしものは直ちに其職を剝ぎ或は其所領を沒收し、又、在家の徒で屢々之れが禁を犯した者は破門の刑に處し更に十一及十二兩世紀になつては生前は姦通罪と同一視され、死後は祖先の墓地に葬ることを禁じたのである、斯くの如き資金制限策によつて何等經濟的壓迫を被むらなかつたものは云ふ迄もなく同一宗教でない猶太人である、而して猶太人の中世に於ける金貸業は十三世紀の中期を中心として之れを二つに區別するを得るのである、第一の時期は專ら生產的資本に對する債權者となりし時代にして第二の時期は專ら消費的資本に對する債權者の時代である、而して後期の時代に於て所謂猶太人追放運動が擴大したことは要するに債務者が自己に對する證文をなくせんとする信用上の恐慌的運動で、換言すれば債權者に對する債務者の帳消運動、資本主義に對する貧民階級の軋轢を意味するものである、斯くの如き場合に於て猶太人が其身の危險を脫する方法は自己の有する全財產を以て王又たは諸侯の財產たらしむることである、而して當時の王侯は何れも財政困難の狀態にありしを以て彼等は一面に於て猶太人を保護すると共に更に他の一面に於ては出來丈け彼等の企業的活力を利用して益々金貸業をなさしめたのである、而して此間の消息を語るものは當時に於ける各國の猶太人に關する法律又たは地方制度に於て彼等が一種財政上の目的物に供せられしことである、換言すれば彼等の保護者は何時と雖彼等の財產の一部又たは全部を賣却し或は他に讓渡し得たのである、又、十一、十二兩世紀に於て彼等の金貸業を發達せしめしものは當時に於ける資金需要の大なりしことである、而して之れが需要

增加の消極的方面に就きては既に前に述べしを以て茲には專ら之れが積極的方面に就きて考察して見たいと思ふ、即ち之れが第一の源因は都市の增加發達で彼の商業の隆盛、手工業の特殊化及之れに關連して新欲望の發展は自から一面に於て資金の需要を惹起せしもので殊にニュルンベルグの如き砂質の瘠土上に築かれし都市にあつては此要求は最も切實であつたのである、第二は宗教的方面の要求で當時歐洲諸國に於て建設せられた莊麗な寺院には巨額の造營費を要し爲めに町人の手を煩はせし場合少くなかつたので即ち、之れが一例を擧ぐればケルン市寺院の建立費がボロニヤ町人によつて融通せられし如きである、又、各地方の僧侶の中には高位高官に登らんが爲め羅馬の本山に巨額の遺物をなす結果、自から資金の需要を必要としたのである。第三は政治上の君主殊に諸侯が戰事用の費用に向つて之れを要求せしことで殊に十字軍時代に於て彼等が要した遠征の費用は更に此要求を大ならしめ又、彼等が東洋方面の奢侈的風習に染みし結果、自己の外的生活を向上せしめんとせし傾向の爲め資金の需要を多からしめたのである、第四は地主階級で彼等は都市の富豪と競爭せし結果、巨額の資金を必要とせし機會が屢々發生したのである。（未完）

慶應義塾の
三田通りの
カフエー
米平堂
電話高輪二二六六
●カルピスとソーダ水
●冷いコーヒーと紅茶
●宴會至便料理と菓子は御存じの美味